

「ナンセンスな」米のアプローチ、BRICS の拡大、キエフの「巨大な」敗北、等

中国メディアに対するプーチンのインタビュー主要点

<https://www.rt.com/russia/585025-putin-interview-chinese-media/>

RT

October 16, 2023



ロシアはもはや、どんなことについてもアメリカを信頼することはない、しかし中国はその約束を確実に果たしつつある、と、ロシア大統領ウラジミールプーチンは言った。

彼はこの2国の信頼の固さを強調し、月曜日の、政治特派員 Wang Guan とのインタビューでこのように述べた。これは、このジャーナリストが中国メディアに成り代わって、ロシア大統領と応対した、その全文である。

その討論の主要点は、次のようなものだった。

国際ルールによる秩序はナンセンス

アメリカの提唱する「ルールに基づいた秩序」という概念は、彼らの植民地主義を偽装したものだ、とプーチンは主張し、ワシントンの決めるこれらのルールは、ケース・バイ・ケースにすぎないと言った。

「いったい、誰も見たことのないルールに基づく秩序を、誰が話題にすることができるのか？ それはナンセンスだ。しかしこのアプローチを提唱する者たちにとっては、それは利益になる。」

過去の植民地主義の強国たちは、自分が「啓蒙思想を導入し」自分の占領した領土に「文明という利益をもたらしたのだ」と主張していたと、ロシア大統領は言った。「アメリカ例外主義」とは、アメリカ人が、歴史上の植民地主義者と全く同じように、世界の残りの者たちを「二流の者たち」と考えていたことを意味する。

モスクワはこの考え方を拒否し、多元的世界を求めようとする。これはすべての国家が平等なものとして扱われるということだ、と大統領は言った。

多元的志向 (multipolarity) は避けられない

どちらにせよ結局、新しいグローバルな世界の在り方が生まれつつある、とプーチンは予言した。

「我々はこの過程をスピードアップすることができる。あるいは誰かが、これをスローダウンして、多元的な世界の建設のペースを落とすことに成功するかもしれない。しかし結局、その創造の過程を避けることはできない。」

主導的な非西洋経済圏の BRICS グループの、今年の拡大は、その方向への大きな一歩だったと、プーチンは考えている。更に6つの新しいメンバーが加わったことによって、それは西側の G7 クラブの経済力を、上回ったと彼は言った。

「誰も、どこかの主人に隷従しようとする者はいない。あらゆる者が平等な権利を得ようとする。そして彼らが BRICS に加入しようと思うなら、我々は、この目標を達成できることになる。」

アメリカは信頼できない

ワシントンは、政治的な気まぐれによって、前に約束したことを破棄する習慣を持っている。これは、イランの核プログラムの多面的な合意を、彼らが離脱したことに見て取れる、とプーチンは言い、ウクライナ紛争も同じ問題に根付いている、とつけ加えた。

「我々は 1991 年まで遡って——当時のアメリカ政府によって——NATO はこれ以上、東へは拡張しないと言われてきた。が、それ以来、5 回もの NATO 拡張の波があった。」

「もし新しい政府ができるたびに、初めからやり直すなら、我々は何に合意することもできなくなる。」

キエフの戦場での敗北の実情、

プーチンは、その隣国とのロシアの戦いの、歴史の概略を語った。それは2008年の、ウクライナをメンバーとするNATOの約束から始まり、西側の援助による2014年のキエフの武装クーデタと、ドンバスにおける紛争、ウクライナ政府の暴徒との和解のロードマップの実現拒否、そして昨年の、モスクワに対する軍事的勝利を当てにして起草した休戦の、拒否決定にまで及んでいる。

「彼らは[先の6月に]活発な軍事作戦を開始し、これが反攻勢と言われているものだ」と、大統領は、最近の対戦の様相を説明した。「これまでどんな結果も達成されていない。ただ膨大な損失があるのみだ。彼らの失ったものは膨大としか言いようがない。比率にすれば1対8だ。」

ロシアは紛争の解決を求めており、中国の提案が基本として役立つかもしれないと考えている、と大統領は言った。——しかし、会談を可能にするのはウクライナ次第だ、彼らはプーチンとの交渉の禁止を法律化したからだ。

習近平の言葉は信用できる

このインタビューの大きな部分が、ロシア-中国の共同作業と、プーチンの習中国大統領との友情に当てられた。プーチンは、その成果は、過去15年の両国の絆の急速な発展によるものだと考えている。

ロシアの指導者は、彼の中国の同僚を「細部に注意が行き届き、冷静で、実務的で、信用できるパートナーだ」と評し、特に習氏の信頼の固さ強調した。

習の管理・統治への戦略的アプローチは際立っているが、それに比べ、「〈時流に乗る者〉time servers」と言われ、国際舞台で、しばらくの間は見栄を切ってみせるが、やがて消えてしまう人々とは全く別物だ」と、プーチンは言った。

[訳者 Greatchain 注]

これは中国の記者団に対するプーチン大統領の、例によって明瞭でわかりやすい発言だが、実はこれに注目した理由が別にある。まず「**国際ルールによる秩序**」という言葉に注目せよ。これはどこかで聞いた言葉ではないか？ そう、わが岸田首相が、ウクライナ紛争が始まったとき、ロシアを強く非難して、そんな言い方を繰り返した。我々（少なくとも私）は、これを聞いて、その居丈高さ加減にドキリとした。プーチン大統領は「ナンセンスだ、そんなものがどこにある、誰が決めたのだ？」と、**バイデンを指す体にして**、言っている。これはプーチン氏も、我々と同様にドキリとした（そして同時に腹を立てた）証拠であろう。しかし彼は賢明にも、日本の首相とは言わなかった。

日本の首相によるこの発言が、いかに彼には**コタエタ**か、そして密かに軽蔑したかの証拠が、この最後の、私による強調部分に歴然と現れている。私はこの首相発言が気になって、これまで何度か取り上げた。やはりこれは、外交的に極めて不適切だったと思う。なぜならプーチン大統領には、軍事行動を起こすだけの理由があったからで、その経緯がここにも簡単に述べられている。日本政府はその理由を一言も問わず、今に至るまで（おそらく官民ともに）ロシアを断罪し、ウクライナを正義の味方と考えている。

なぜそれほど自信があるのか？ その理由として考えられるのは、彼らは悪の根がどこにあるのか考えようともせず、そもそも悪というものの存在を認めていないからである。メディアは一般にそのような態度を取り、それを売り物にさえしている。彼らから見れば、争っているイスラエルとパレスチナの、どちらかを悪者にしなければならないが、どうもそういうわけにもいかず、ごまかし続けるより方法がないだろう。ではどう考えるか？——この双方をうまく騙して戦わせ、（ウクライナ政府のように）解決をどこまでも拒否し、第3次大戦の泥沼へと持ち込もうとする悪なる勢力が、存在すると考えねばならない。これは仮説としてでも、そう考えてみなければならない。——こうした者たちは神の敵であり、ルシファー信者として、我々を含めた、この世界そのものを破壊しようとしている——そう考えたとき、次々と世界の謎が解けてくるであろう。